江戸時代諸國奇談

原武男

河出書房新社

江戸時代諸國奇談

原　武男

河出書房新社

著者略歴

明治42年（1909）秋田県生まれ。秋田師範学校卒業，教職歴21年，秋田県立秋田図書館勤務。現在同館嘱託，秋田県文化財専門委員。著書「秋田県文化史年表」「秋田県立秋田図書館沿革誌」「秋田巷談」「秋田県人の発明考案」「新編佐竹系図——宗家の巻——」「資料佐竹義隆公附光聚院様」ほか。

江戸時代諸国奇談

著者　原　武男
発行者　中島隆之

発行所　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
印刷・三松堂印刷　製本・小泉製本

昭和四十八年十二月十日初版一刷発行

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示してあります

© 1973

まえがき

江戸時代に書かれた記録類を見ると、ふしぎ、または珍しいと思われる記事が、思いのほかに多く載せられていることに気づく。当時板行されて紙価を高めたもの、あるいは書写して読み廻されたもの、または筐底深く秘められて公にされなかったもの、反故紙に書かれたまま清書の段階に至らぬものなど、いろいろの形をとりながら今日に受け継がれており、今となっては一般の方がたには縁遠い、読解できぬ資料もずいぶん多い。したがって事件、事実のあった頃は盛んに巷間に喧伝されておったものが、現今では全く伝わらぬという話も相当数にのぼっている。いや、ほとんどといってよい。

本書におさめられた話は、公開、未公開を問わず、そのいずれもが今に書き残されたものから採ったもので、口伝えに現在に至ったいわゆる民話なるものではない。全部が江戸時代の人の筆になったものであり、話のほとんど（一部中国など）が江戸時代のできごとである。中にはひどい内容のものもあったが、それはしばらく措き、一応どなたにも障りのないものを選んで一冊にまとめてみた。

もちろん話題を提供するための興味ある話であることをねらったものであるが、なお、江戸時代の人びとの物の考え方はどんなであったか、天然自然とどう調和していったか、いわゆる人の生きがいとは何であったか、奇話、珍話の中からこれらを理解していただく

ことができるならば、私の満足とするところである。原文そのものはそれほど理解し易いものではなく、おもしろいものでもないのが多い。事実を枉げぬ程度に翻案したものであることをご諒解たまわりたい。

本書は百十八題、百三十五話をとりあげた。一題目ごと違った話であるから、どこから読んでもらってもよいようにできている。巻末に原著の小解をつけておいた。

昭和四十八年九月二十五日

原　武男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

まえがき……一
平蔵様……一一
村上家の術士……一四
親の助命……一六
手のひらのしるし……二〇
身代り観音……二四
吉益周助の見立て……二五
竹皮包みの刀……二七
二本松の狐……三〇
鬼瓦……三三
即死する杣人たち……三七
田の中のさむらい……三八
陽物を拝む……四〇
不急の鯨船……四一
目を抜くカラス……四三
鷲切……四五
相学奇談……四七
走り廻る鼠……五一
蚰蜒の毒……五三
つづらを捨てた女……五四
腹鼓……五七
九文で五百石……五九
汗をかく木像……六一
通力の印可……六三

大黒の加護……六四
わが家に誘う死人……六五
老儒者と狸……六八
年のちがった夫婦の霊……七一
山中の異女……七三
酒を贈る大家……七五
百発百中……七七
浅草の猫……七八
三十荷の嫁入道具……八〇
火魂……八五
美人の料理……八七
鴻池の酒……八九
金をつかむ僧と呑む僧……九一
翁稲荷……九二
かみ付く動物……九四
二王の霊験……九六
離縁された嫁……九八
恩を忘れた人たち……一〇〇
海に入る娘……一〇三
古枕……一〇四
相者中村嘉右衛門……一〇六
白蛇……一〇八
嫌うもの……一一〇
穴入異聞……一一四
大陰嚢を売る……一一七
邯鄲の玄庵……一一九
絵の美人……一二三
夢の告げ……一二四

貞節……一二六
幽界から帰る……一二八
祈る男たち……一三三
欺淫……一三五
足りない泥亀……一三七
乞食元碩……一三九
白犬……一四三
狐の義理……一四三
身代りの梅の木……一四五
傾城の袈裟……一四七
神仙の薬法……一四九
貧乏神……一五一
金二百疋の恩……一五三
水におぼれない法……一五四
妻の出家……一五六
門内に入る火玉……一五九
狐の化身……一六〇
賤女の預った財布……一六四
蛍の毒……一六七
金花猫……一六九
金比羅様の板……一七二
故郷に飛んだ若者……一七三
小堀家の稲荷……一七四
石燈籠……一七五
弘法大師様か……一七八
福を与える狐……一八一
猫の声……一八五
誘われた中川右内……一八九

真言宗の僧……一九一
浅野の稲荷……一九三
御代官の巡見……一九六
香炉つくりのカメ女……一九六
見えなくなる笠……一九九
腹中の異物……二〇一
土州公の御落胤……二〇三
河内の人……二〇五
伊兵衛宅の稲荷……二〇九
蛇酒……二一一
和歌の徳……二一四
広徳寺の門……二一五
たばこを食った大蛇……二一九
山神の薬法……二二〇
弁財天と契る……二二三
猿廻しの猿……二二六
通詞役西長十郎……二二七
三折の墓……二二九
酒の風味……二三〇
石を打ちつけられた坊さん……二三一
白衣の神体……二三三
飛礫……二三五
陰徳の報い……二三八
鼓うて、箏ひかん……二四〇
雁の首の財布……二四一
老人の所持した書付……二四五
宮城野の萩……二四七
龍石……二五一

遺物の間違い……二五四
御用の狐……二五六
乞食の拾い物……二五八
丹後の人……二六〇
こぼれ口の狐……二六二
吉夢……二七〇
蠑螈の怪……二七二
龍となった娘……二七六
もらった手ぬぐい……二七九
アメリカの狐……二八一
出てくる銭……二八二
原著小解……二八八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

江戸時代諸国奇談

平蔵様

江戸本所花町に火附改役長谷川平蔵というさむらいが勤番していた。賞罰が公正で、慈悲心が深く、頓智のさばきが多くて、人びとから「今大岡殿」といわれ、「本所の平蔵様」といえば、ああ、あの人かとわかる有名人であった。幕府当局も、この人の働きを高く評価しており、何とかして町奉行まで昇進させてやりたかったらしいが、家柄が重視されておった当時のこととて、ついにその沙汰がなく終った人である。しかし、評判は奉行以上であった。

話変って、そのころ本所三ツ目のあたりに、大工職をしていた平蔵という者がいた。稼ぎのために京に上って仕事をしていた。気ップのいい大工であったので、人びとの受けもよく、三年ばかりいるうちに顔見知りが多くなり、深い交際をする人たちもふえていた。江戸へ帰るにおよんで、友人たちに、

「もし、おいらをたよって江戸に来るようであったら、本所で平蔵といってたずねて来ると、じきに知れるから、遠慮なく来てくれ」

といった。

ここに京都の一人の仲間大工。平蔵が帰ってからというもの仕事も思わしくなかったので、彼の平蔵をたより、江戸に出て一骨折って見ようと思い、道具をまとめてはるばる江戸へ下った。本所まで来て

みたが、さすがに江戸は広い。逢う人にたずね、店にはいって聞いてみたりしたが、町の名がわからぬので取り付く島もない。

「本所の平蔵といえば知らぬ者がないという話でしたので、町名は聞いておりませんでしたが――」

といったら、

「ああ、そうでしたか。それでは長谷川様のことでしょう。その方ならみんなが知っています」

といって、行く道を教えてくれた。花町という所へ行って聞けば、じきに知れるというのである。

花町に来て聞いたら、つい向うのお屋敷だという。門のある構え――どうやら様子が違うようだと思いながら、はいろうとしたら門番に見とがめられた。其方いずくの者でどこへ参るのかをただされた。

「私事は京都の者でありまして、平蔵さんに用事があって参りました。お目にかかればわかることであります。平蔵さんが御在宅でしたら逢わせてください」

何という、上をないがしろにした物のいい方、それに服装も上等でない。正気で物をいっているのであろうか。門番は胡乱(うろん)な奴と思い、追い出しにかかったが、平蔵に追い出されては江戸まで来たのぞみが水の泡になってしまう。京都の大工は必死であった。ただでは帰らぬと見てとった門番は、縛るより方法がないと思い、この野郎といって縄をまわしたが別に抵抗する様子も見えない。

この捫着(もんちゃく)が奥まで聞こえた。何か子細があるに違いないと見てとった平蔵は、縄打ちに及ばず、そのまま連れて来るように命じて、白洲で対面することとなった。いわれたとおり頭をさげて、平蔵の声のかかるのを待った。

「上方(かみがた)から平蔵に逢うためにたずねて来たというのは其方であるか。平蔵は拙者であるぞ」

江戸では平蔵がこんなに幅がきいていたのか、それにしては声色が変だと思いながら、ひょいと頭を

あげてみればりっぱな武士。年齢のほども違い、堂々たるその威儀、第一、顔立ちが全く違う。ハハアーとひとりでに大工の頭がさがってしまった。

何かわけがあるに違いないと見てとった平蔵は、ことばをやわらげた。

「遠路わざわざたずねて来たのは、何か子細のあることであろう。つぶさに話して見よ」

との仰せに、人違いでしたからとて、このまま帰るわけに行かぬと思った大工は、ありのままを語った。自分の名にひっかけて大工の平蔵が戯れにいったことは平蔵にはよくわかる。しかし、このことは口には出さない。

「明日その方のたずねる平蔵にあわせてつかわす」

といって平蔵は奥へ引っ込み、大工はあき部屋に泊められた。

平蔵と名乗る者残らず明日六ツ時（午前六時）まかり出るべき配符が本所の町内ごとに急ぎ廻された。よい名であったろう、平蔵と名乗る者が本所だけで五十余人。平蔵様にあやかって付けたと思われる赤ん坊や子供など相当にいる。赤ん坊、子どもたちはそのまま帰された。ヨタヨタの老人にも用がない。壮年者を並べての顔見世、果してこの中に大工の平蔵がいた。他はみな帰された。京から来た男に対面させ、

「はるばる其の方を頼りに来た者であるから、その方へ引き渡す。厚く世話いたし取らせるように。いい加減な扱いは許されない」

といいつけられた。一時の戯れにいったまでで、格別実意があってのことでなかったが、平蔵も今に至っては止むを得ず大工を引き取り、厚く世話してやったということである。

〈「わすれのこり」による〉

村上家の術士

村上周防守義明の家士何某というさむらいは、忍術その他のふしぎな術を心得、どんな堅城へもたやすく忍び入ることができるとの評判をとった男である。

ある時同輩が二、三人連れだって術士の家に出かけ、いろいろな物語りをしたが、話のついでに彼はいう。

「おのおの方、天河の鮎というものをたべたことがありますか」

いかに興味半分の話とはいえ、天の川に鮎などいるものか。殊に今は冬である。鮎の姿など拝むことさえできぬ季節である。「冗談いっちゃ困る」と口ぐちにいう。術士は、

「それでは雪のもてなしに銀河の鮎というものをごちそうしてあげよう。おのおの方、よくごらんになってください」

といって下僕を呼び、細引を何本も持って来させた。座敷でその細引を長く結び合わせ、さて庭へ出た。友人たちも珍し半分について行って、その所作を逐一見ることとした。

術士は端をしっかと握り、細引を空へ投げ上げると、それが竿のように立ってどこまでも天に上って行く。術士はそれにつかまって上りはじめた。その早いこと、鳥の飛ぶよりもずっと早い。やがて体が半分ぐらいになり、石ころぐらいになり、豆つぶほどになって、とうとう見えなくなってしまった。友人たちはポカンとして突っ立ったまま空を見ているだけ。

しばらくして、術士が雲中にあらわれ、程なく庭上に降り立った。細引を引いてたぐり寄せ、下僕に持って行かせた後、たもとの中からピチピチと動いている鮎を二、三十も取り出した。大きさ七寸ばか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com